

# 農家の友

9

人を、知恵を、技術を育む  
Agri-Magazine for Hokkaido

2017  
September

特集I

若者が見た二コージーランド・  
アメリカの農業

特集II 地域資源(ひと、もの)を  
最大限に生かした活動を学ぶ

特集III 農家の相続を考える



ミニトマトのハウスで笑顔を見せる  
ふるさとファームの代表の東海林さん

# 新規就農から法人経営に挑戦。 女性の「チカラ」でWAP100に認定

農業生産法人(株)ふるさとファーム  
代表取締役 東海林 幸恵さん(札幌市)

酪農出身から大学、  
農高教師、新規就農へ



(公社)日本農業法人協会が平成27年度から全国の農業経営体を対象に選定を始めたWAP100。WAPとは、「農業経営(体)における女性の積極的な参画」の英訳の頭文字で、札幌の「株)ふるさとファーム」は28年度に認定された全国28経営体の一つ。認定理由は、「若手女性経営者の求心力による異色の法人経営」。その女性若手経営者とは、新規就農で農業を始めた東海林幸恵さん(31歳)。かつてはリンゴの产地として栄えた札幌市南区の農場で野菜作りに励んでいる。

東海林さんは標茶町の酪農家の末っ子の長女で、地元の高校を卒業後は農業科の教員免許を取得するため、酪農学園大学に進学。「実家は兄たちがいるので、私は大学に行かせてもらいましたが、学外で農作業や販売、農業体験の企画などといった活動に参加するほうが熱心だったかも」と笑う。そして、「自分が経験していないことを子どもたちに教えることに疑問を持ち、現場を知ることの重要さに気付いた」と振り返り、新規就農者を支援する札幌市内のNPOなどで、農業も経験を積ん

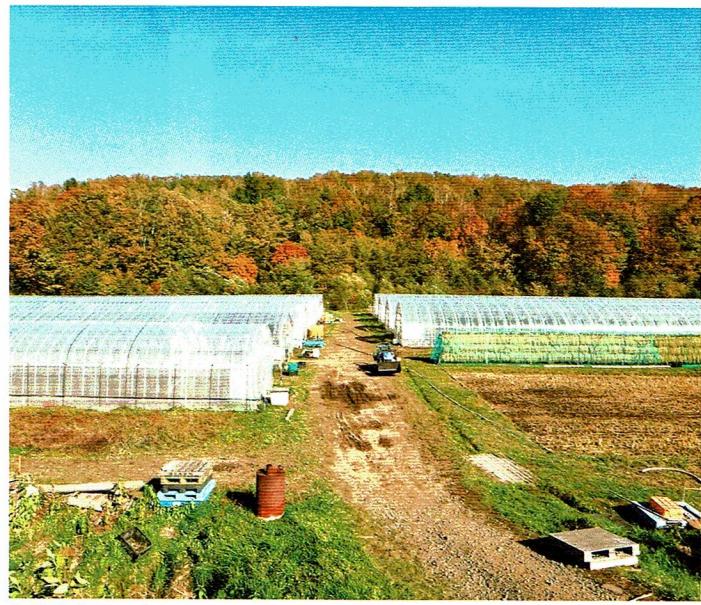




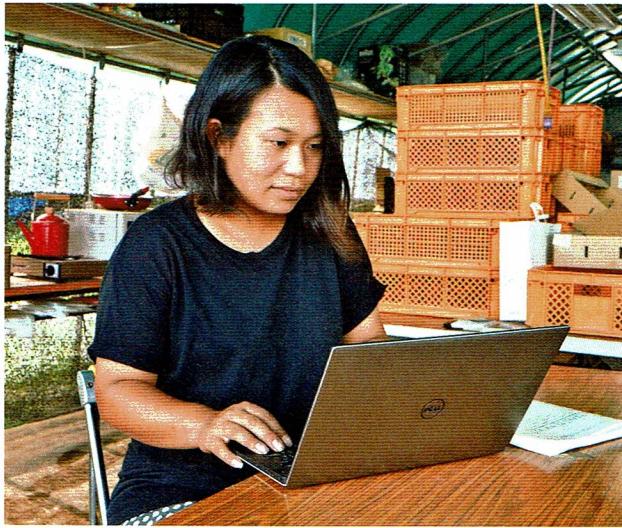
ミニトマトが終わると、ハウスでは寒締めホウレンソウを栽培（写真提供：ふるさとファーム）



収穫した野菜はコープさっぽろの「ご近所やさい」のコーナーで販売している（写真提供：ふるさとファーム）



札幌市南区石山のふるさとファーム。野生動物もいる自然の中にある



作業用ハウスでパソコンを開き、データなどをチェックする東海林さん



「アイコ」を「札幌野菜」のロゴが入った袋で販売



主力作物のミニトマト「アイコ」。収穫後、すぐに選別、袋詰めが行われる

## 女性パート従業員を頼りに、ミニトマトなどの野菜を生産

だ。そして、23年間に仲間とふるさとファームを設立。東海林さんは、「自分から積極的に取り組むタイプではないのですが、出会った人たちに機会をいただいて、こうなった感じでけてもらひながらという感じです」

「隣地のベテラン農家さんに助けてもらひながらという感じです」と照れくさそうだ。

会社設立当初、東海林さんは農場長として生産現場を任せられてきたが、一昨年からは代表に就任。仕事の内容や意識も変わる中、WAP100に選ばれたことで、農業系の雑誌や新聞からの取材依頼も増えた。「経営者として、数字的なことはもちろんですが、営業や広報的なこともやらなければならないと思つています。そして、メインの仕事はパートさんたちに的確な指示を出すこと。作業のやり方を伝えることの難しさを実感しています」と東海林さん。

パート従業員は近隣の主婦など複数人を抱え、通常は3人、収穫の繁忙期には追加で数人が作業に当たっている。東海林さんが、「袋詰めなどは消費者でもある主婦のほうに向いています。うちは女性のパートさんがいないと成り立ちませ

ん」と言うように、収穫から選別、袋詰めまで、一連の作業はパート従業員が中心にこなす。今後は正社員になつてくれる人材の育成が課題のようだ。

経営面積は借地約2・5haで、栽培用ビニールハウス10棟と育苗用のハウス1棟、休憩室も兼ねた作業用ハウス1棟のほかは露地の畑。作物はミニトマトの「アイコ」がメインで、ビニールハウス全棟を使って、6月下旬から10月下旬ごろまで収穫が続く。露地ではズッキーニやナス、カボチャなどの野菜も育て、ミニトマトが終わると、ハウスでは寒締めホウレンソウを栽培している。

販売先はコープさっぽろが各店舗にコーナーを持つ「ご近所やさい」に特化している。「コープさっぽろの配送センターを活用し、市内と近郊の約25店舗になるべく毎日出荷していますが、店舗の規模や立地によって売れる数や売れ筋の価格も違います。各店舗の売れ行きのチェックや、近隣スーパーのセールなどの情報収集を欠かさず、そのデータをもとに価格や出荷数の調整を日々行っています」とパソコンに向かいながら話す東海林さんは経営者の顔だった。特に品質の良い「アイコ」は「札幌蕃加（ばんか）」のブランド名でインターネット販売（[www.sapporobanka.jp](http://www.sapporobanka.jp)）もしている。

## 札幌の子どもたちのために、 食育のNPOも設立



畑の中で自由に遊ぶ子どもたち。時には農作業の手伝いもしている



東海林さんの友人から譲ってもらった余り苗で、米も作っている



NPO法人「あぐりばる」ではカレーライスを作るための作物を育てている

一方、24年4月には内閣府の地域社会雇用創造事業の採択を受け、ふるさとファーム内にNPO法人「あぐりばる」を設立。農場の一部を子どもたちがいつでも自由に作物と触れ合える場所にした。畑では米とジャガイモ、ニンジン、タマネギを育てながら、毎月1回、農作業体験のイベントを開催。収穫後はみんなで、カレーラ



「あぐりばる」の水田では子どもたちと一緒に稲刈りのイベントも（写真提供：ふるさとファーム）

イスを作りたかったので、「自分は牧場で育つ」という生活でした。札幌の子どもたちはそういう体験ができる場所がないので、自然や農業に触れる場所をつくりたかった」と東海林さん。パート従業員が子どもを連れてくるのも自由で、子どもたちは農作業を手伝ったり、カエルやバッタを捕まえたり、伸び伸びと遊んでいる。パート従業員の一人は、「子どもがいると、急な病気や学校行事などで仕事を休まなければならぬ時もあって、働き口を見つけるのも大変ですが、東海林さんは全て受け入れてくれるのです助かっています」と笑顔で話す。東海林さんは、「休みの人が出たら、その分、次の日に取り戻せばいいという気持ちでやっています」と、前向きだ。

### 「札幌野菜」を売りに 農業経営に奮闘中



東海林さんに今後の目標を尋ねると、「第1段階である施設栽培については、今年でハウス総数は10棟に達し、施設の売り上げとしては目標に達したので、第2段階である露地の栽培面積を増やしていくことと、収量をアップさせる技術を確立できること」と、まずは年間1500万

円の安定的な売上確保を目指している。実際、25年には602万円だった売り上げは27年に1181万円に増加。認定農業者となるために提出した農業経営改善計画では、計画開始後5年で黒字化、10年目に累積損失の一掃としたが、この計画は2年の前倒しで、達成しそうな勢いだ。

東海林さんは、「栽培技術はまだまだ勉強不足。おいしい野菜作りへのこだわりを聞かれると困りますが、コーブさつぽろでの販売は収穫したその日に、自分たちで持ち込む新鮮さが売りです。『札幌野菜』のロゴの入ったオリジナルの袋で、新鮮な地元野菜をアピールしていく」と笑顔を見せる。

取材に訪れた8月のある日、ビニールハウス内にエゾシカが現れ、追い払う一幕に出合った。「女性が就農したこともうそうですが、市内で農業をやっていること 자체が珍しくて、現実をイメージできない人も多いと思います。ここはエゾシカやアライグマの被害も多いし、牧草地を耕して、畑にする作業は本当に大変でした。私たちのように札幌で農業をやっている人たちがいることをもっと知ってほしいですね」。東海林さんは第2のふるさと札幌で、奮闘する毎日だ。

（フリーライター／梅村敦子）